

# 個性と創意を守るため



牛島義友

おとなよりもすぐれた幼児の心性はその独創性にある。ま

た幼児教育は子どもの個性を尊重しそれを育成することにあると言われていた。ところがこの幼児の個性と創意とが無視され喪失する危険にせまられているのではなからうか。これは単に幼児教育のみならず、今日の一般の社会生活にもあてはまることかもしれないが、保育界においても特にこのことを憂い、これを守ることがこれからの課題になるのではなからうか。

しかもこれらの個性や創意の喪失は文明の進歩、社会組織の強化に伴って増大してきている面があるだけに解決の困難な課題のようである。話をもっと具体的な点に戻して考えて

みよう。

児童文化、テレビの功罪についてはいろいろと論じられてはいるが、これが直接与える犯罪への誘発、スーパーマンの模倣などはそれほどたいしたことはないと思う。それよりもいみじくも一億総白痴化と評された聴視者達の興味や関心の一般化、低水準化が問題である。

テレビやラジオ、或いは新聞でも同様であるが、これを毎日見ていると、一種の中毒症状が起ってくる。即ちテレビが写っている間は見なければならぬような気持ちに強迫される。勉強し本を読む場合にもラジオを聞きながらするようないわゆる「ながら族」になる傾向がある。ラジオの音楽を

聞きながら仕事したり勉強したりすることは必ずしも能率を害したり、激しく疲労したりすることはないかもしれない。しかしテレビを見ながら読書したり勉強したり、または自ら演奏することは絶対に不可能である。このテレビに人々の関心が占領されてしまうところに一億総白痴化の危険がある。

或いはまた今日の子どもが歌う歌の中には昔の童謡が消えてなくなり、コマージュのテーマソングなどに代ったし、また今日ほど児童文学のふるわない時代も少ない。近代的なマス・メディアは子どもの童心を培い、子どもの独創の世界を發展さすことにはマイナスの影響を与えたといわねばなるまい。しかもこのテレビなどの發達は人類の作った偉大な文明の成果であり、今さらテレビ抹殺論をしても問題にならないだけに悩みは深刻である。

**保育内容** 今日**の保育要領**は個々の保育内容についても研究が積まれ、組織的、計画的にもなってきた。しかしこの進歩した保育内容や技術は子どもを自由に遊ばせ、彼らの好むところを勝手にやらせていた頃のものにくらべて果して子どもの個性をよりよくのばすものと言えるであろうか。否、その前に幼稚園や保育所において計画的に保育される者と家庭

や街頭において勝手に遊んでいる子どもとでどちらが個性的であるか、今一度反省してみる必要はないであろうか。今日の保育の世界においては社会性の育成に非常に力が入れられている。ここでは孤立児や社会的不適応児は少なくなっている。しかし一人遊びがどれだけ尊重されているであろうか。

家庭の子ども、イギリスの保育などにおいては一人遊びが尊重され、小さい時から個性的な態度が見られるが、わがくにの保育では社会性の育成の名のもとで個性の發展が止められている面がないであろうか。少なくとも西欧の人達と日本の人とくらべて目立つことは個性の弱さである。集団への所屬的態度だけは人一倍強いが、權威や世論、指導者に引き廻される傾向が強く、自から指導者となろうとするほどの意欲も少ないし、また光榮ある孤立主義者もあまり見られない。幼児期における劣等感によく指導された場合には強固な個性の根元にもなるもので、円満な社会的適應者からは個性的存在は生れにくい。

また保育内容が計画的になり、整然たるカリキュラムが立てられるほど、自由遊びの時間は少なくなり、保育項目の中から抹殺されさえする。また保育指導が行きわたるほど、つよいよいな指導が加わる危険もふえるのではなからうか。日

本の創造美育は保育界において非常な貢献もしたが、この運動は一層盛になりつつあると果して言えるであろうか。しかもこれをおびやかすものは無計画、放任性ではなく、逆に計画的保育であるところに悩みがある。

幼稚園教育の義務制、幼児教育の必要が広くみとめられ、幼稚園教育の義務制となることは幼児教育の前進であり、また識者達の要望する教育政策である。義務制になり、無償ですべての幼児達が教育されることは結構なことであるし、またその教育内容や指導について国において責任をもって指導することは幼児教育の進歩であろう。これについては何ら反対すべきではないにも拘らず一抹の不安を消すことができない。

子どもの個性や創意が尊重されるためには、幼稚園そのものも個性的であり、創造的であることがのぞましい。幸いに今日日本の幼稚園の大部分は私立幼稚園であり、その個性と創意にめぐまれている。否公立にくらべて私立の唯一の取り柄はこの点にあるのかもしれない。教育者が真に自分の仕事に目ざめ、自由に自分の理想を生かすためには、自分で学校を創設したいという願いを持ってくる。明治・大正の時代にはこのような教育者の個人の意志から学校をはじめめることも

比較的容易であったかもしれない。しかし今日においては莫大な経費を必要とするために高等学校以上の学校を個人では始めることは不可能に近い。これが可能なのはただ幼稚園の世界だけであると言っても過言ではあるまい。そのために今日見られるように日本では幼稚園（保育所も含めて）に私立のものが多し。この園長と小・中・高の校長達と較べてどちらが濼測としており、個性と創意に富んでいるかは説明するまでもなからう。中には変りすぎて重みを欠くものもなくもないが、その個性的創造的精神は高く評価されるべきであろう。この個性的創造的精神が義務制になることによって抑圧されるところに大きな問題がある。不幸にして日本では私立は尊重されない。文部省が私立を軽視するだけでなく、父兄達も私立よりも官立を尊重する傾向が強い。幼稚園が義務制になったら多くの私立幼稚園は閉鎖の運命にあうか、公立に吸収される危険がある。この現象をただ教育行政の進歩とのみ見てよいものであろうか。子どもの教育費は私立学校に対しても委託の形で国費から大幅に廻すべきであろう。

また義務教育は教育の普及のためになすべきものであって、教育の統制のためには困る。教育の普及と教育の自主性を尊重するためには長い歴史的経験が必要であ

り、一朝にして両立できるものではないかもしれない。明治時代における国家の統制による教育の普及の功績は大きい。

しかしそのために今日では国家の監視なしには教育の自立ができないほど自主性が乏しい。私立学校がもっと強力であれば文部省と日教組との関係ももっとちがった形になったであろう。

**最低規準** 今日幼稚園や保育所の設置の最低規準が問題になっている。幼児や子ども達の保育環境をよくするためには最低規準は高くなる方がのぞましいことである。一クラスの人数がより少なくなり、一人あたりの坪数が増加し専門職員や設備費などが高く要求されることはのぞましいことである。しかし現実の幼稚園保育所の経営者や父兄にとつてはそれほど簡単な事柄ではない。公立の幼稚園や保育所においては最低規準を高めることは当然国家に負担を義務づけることとなるから、直接には何の問題はない。大蔵省さえ承知してくれば今よりもよりよい幼稚園や保育所がひとりできてくる。しかし私立幼稚園や私立保育所においてはそうはいかない。より高い規準にそなえるための建築費や人件費の増加の大部分は自力でまかなわねばならないし、ひいては保育料の増額という形で保護者に転化されてくる。保護者には負

担能力に限界があるので私立をさけて公立をえらぶという傾向が起れば結局私立の圧迫ということになってしまう。

今日の幼稚園の最低規準は期限内に実施が不可能なほど高すぎるものとなっている。このような高い規準を要求することは考え直されねばならぬ時期ではなからうか。

保育所の最低規準は保母や職員の増加に対しては措置費の増加の裏付けがあるので歓迎されるが、設備の最低規準をあげることは私立保育所からは敬遠されてくる。私立の幼稚園や保育所をつぶすのが目的でないならば最低規準の引上げという進歩的改革にもまた考慮しなければならぬ問題が含まれている。

以上幼児教育の当面しているいくつかの問題についてとり上げてみた。新しい春を祝う楽しい積極論に水をさすような事柄になってしまったけれども、所得倍増策が株価の暴落を引き起したように、保育の積極的改革論がかえって保育の進歩を妨げたり、大切な保育の心髄を損うことがあってはたいへんだと考えるあまり、このようなものとなってしまった。

この保育の中に含まれた矛盾を解決するためには、読者の若い個性と創意に期待して筆をおきたい。